

旧立山炭鉱坑道入口銘板と、かつて芦峯寺に存在した炭鉱をめぐる覚書

吉野 俊哉

はじめに

かつて、芦峯寺地内には炭鉱があり石炭を産出していた。県史や立山町史にも具体的な記載が無いこの炭鉱は、昭和25年（1950）までには生産を停止し閉鎖された。それから70年近くが過ぎ、現在地元芦峯寺でもその存在を知る方はほとんどおらず、また炭鉱についてまとめられた資料も管見しない。これまで地元芦峯寺でも詳細が知られて来なかったのは、炭鉱で働いた者の多くが地元ではなく、採炭の期間だけ一時的に県外から来ていたために、閉鎖後にほとんどが富山を離れてしまったことも大きい。

炭鉱の存在は、芦峯寺の記憶としてこのまま風化してしまうには残念で重要な事実であり、まだ聞き取りが可能なうちに記憶を発掘し、文字や写真などの関係資料と照合し記録するのは急を要することと思われた。

この、かつての炭鉱をめぐる記憶を覚書として残す契機となったのは、現在当館が保管する、恐らく現地以外で現存する唯一の立山炭鉱に関する実物資料と思われる、「立山開発坑」と刻まれた「旧立山炭鉱坑道入口銘板」（法量等は次章に掲載。以下、炭坑銘板）を調査する必要からであった。わずか70年前の事にも拘わらず、この炭坑銘板をめぐる歴史を調査してまとめることは、断片的かつ極めて乏しい情報の中で進めざるを得ないものであった。そして、これにより単に芦峯寺で石炭が採れたという事実の確認だけではなく、炭鉱をめぐるさまざまな人、社会、資金の繋がりが、戦中戦後の歴史に翻弄されて来たことを知ることとなった。それは具体的には、戦争を前後したエネルギー政策による石炭産業の隆盛と衰退の歴史でもあった。

調査は、当時のことを知る地元芦峯寺の関係者からの聞き取りと、関連統計表、そして当時の新聞記事、関連する企業・団体等の周年史などの文字情報と地図・写真などの画像情報を掘り出し、照合することで進めた。そこで得られたデータから芦峯寺にあった炭鉱を様々な切り口から語るため、(1)「炭鉱の概要」、(2)「そこで暮らした人々の生活」、(3)「石炭の輸送」をキーワードに章立てし、石炭鉱脈発見から試掘、採炭に関わった企業、炭鉱の村にあった分教場、富山県営鉄道芦峯寺駅をめぐる歴史を重層的に明らかにしたい。

そこで次章以下、調査の契機となった炭坑銘板の概略を述べた後、前述の3つのキーワードに沿って論を進めることとした。

1. 炭坑銘板について

炭坑銘板（写真1）は、平成24年（2012）度に当館が預かったものである。立山炭鉱は昭和25年には休山したが、炭鉱を最後に経営していた不二越鉱業立山礦業所で経理を担当し、閉鎖時に現地で最終的な残務整理を担当された志鷹美弘氏（故人）が思い出として譲り受け、その後永く保管しておられた物である。志鷹氏逝去後もご遺族が保管しておられたが、そのまま廃棄するには忍びず、佐伯信春氏（当時芦峯寺総代）に相談。博物館での保管を希望され、現在は当館で保管しているものである。

縦37cm×横95cm×厚6cm、重量54kg、粘板岩製。かつて芦峯寺地内長尾にあった立山炭鉱の坑道入口に掲げられていたものである。裏面には、部分的に坑道壁面に接着した際のセメントが付着している。表面には右から読むように太い行書体で書かれた「坑發開山立」の五字が大きく浮き彫りになっている。その他に開坑日、揮毫者、設置者などの記載は一切ないため、この銘板がいつ作られ、坑道入口に掲げられたのか不明である。立山炭鉱の試掘開始は昭和13年（1938）、商業ベースの採炭開始が昭和14年（1939）なので、

その時炭鉱を経営していた会社が開坑に当たって設置したものと考えられる。昭和以降開坑の鉱山では、出費を抑えるためこのような重厚な銘板はあまり作られなくなっていったようだが、この炭坑銘板の材質を仔細に見ると、この立山炭鉱脈の地質（手取層群）のものとはほぼ一致しており、恐らく炭鉱開削の時に掘り出した岩盤を利用して鑿で文字を浮き彫りにし、自前で製作したものではないかと推定される⁽¹⁾。

2. 立山炭鉱の概要

2-1 発見から試掘、採掘

芦峯寺地内にあった炭鉱で採掘された石炭に関するまとまった記録は残されておらず、その詳細も不詳である。地元芦峯寺で当時の事を知る方々からの聞き取りと関連資料を照合して明らかになった点は以下の通りである。

2-1-1 位置

坑道があった場所は芦峯寺地内の大辻山と来拝山の間谷部、地元で「志鷹谷（しったかだん）」と呼ばれる場所の奥まったところ、立山村芦峯寺小字長尾（ながお）と呼ばれた地区になる⁽²⁾。国立立山青少年自然の家の北東部の谷状になった地形、距離的には芦峯寺から藤橋へ向かうほぼ中間点に位置する。

芦峯寺では、当時この炭坑及び炭坑従事者の住宅があった場所を「たんざん（炭山）」と呼んでいたが、これは今回いずれの聞き取りでも共通する、地元の通称として定着した名称であった。

閉鎖後はそこへ通じる道は無くなり、樹木の生育に従ってかつての構造物の跡などは隠蔽された状態にあり、現在の地図上で正確な場所の確定はなされていない。そこで当時の地形を知る手掛かりとして、終戦直後昭和23年の測量をもとに修正を行った昭和34年（1954）発行の当該地区50000分の1の地形図、及び昭和22年（1947）にアメリカ軍が撮影した当該区域の空中写真⁽³⁾から、長尾地区の部分に校舎のように整然と並ぶ複数の構造物群が確認できる（写真2、7）。詳細は後述するが、最盛期約150名の従業員とその家族が、ほぼ完結した生活を営んだ集落としての規模は有しているように見える。県道（富山立山公園線）から志鷹谷に入る道路も、現在は無くなってしまったが、仔細に見ると画像上では確認できるようである。現在は一般には行くことは難しいが、1990年頃にそこを訪れたことがある人の記憶では、建物のコンクリート製基礎部分や掘り出した石炭を選別した後の土などを積んだ、所謂ボタ山は閉坑後長く（或いは現在も）あったという。

2-1-2 炭鉱の開坑と採掘

長尾を含む塔ノ倉、東谷地区から白岩にかけては、地層としては手取層上部（東部地域）に属し、炭層を挟む地域⁽⁴⁾である。明治以前から、少なくとも地元では石炭の存在が知られていたよう⁽⁵⁾で、明治初期には婦負郡や八代（氷見）の垂炭や泥炭などとともに内務省博物局にサンプルが収蔵され、研究に供せられた。明治13年（1880）に博物館（現在の国立科学博物館と東京国立博物館の前身）が発行した『博物館列品目録 天産物第三 鉱物類』にここで採集された試料が記載されている⁽⁶⁾。明治新政府による殖産興業政策の推進のため、石炭や有用な鉱物資源の発見と開発が要請されていた時代、各地から試料を収集して調査が行われていた時のものである。県内（但し、明治4年～9年までは新川県、以後明治16年までは石川県）では、氷見や上市とともに立山での炭層の存在は知られてはいたようだが、試掘や商業ベースでの採掘を行う動きが出てくるのはずっと後になってからである。

立山地区での鉱山開発では、大正7年（1918）には、硬質陶器の原料製造のため資源の採掘を目指して大規模な開発会社を興す動きも見られた⁽⁷⁾。この頃から立山の鉱物資源の開発には熱い目が向けられていったようで、翌大正8年（1919）7月の新聞には「芦峯に無煙炭発見 鉱区七十六万坪で七尺層」の見出し

でセンセーショナルな記事⁽⁸⁾が載り、有望な炭層であり早速東京で出資者を募って開発しようとする動きもあったやに報じられた。記事によれば試掘が計画されたようだが、炭坑の開発、採炭が行われた記録は管見できなかった。

中新川郡内、特に立山、大山地区でこの時代に鉱山試掘申請、商業ベースの採炭が行われた地域では『大阪鑛山監督局管内鑛區一覽』（以下『鑛區一覽』）を管見すると、大正末から昭和初期には立山・東谷地区で東京の鉱山開発者、所謂山師たちが毎年試掘の申請をしていたことがわかる。試掘申請者と開発業者は必ずしも同一者とは限らないが、彼らがその後鉱山経営を行った記録の記載はない。

志鷹谷の長尾地区で炭鉱を開発する具体的な動きが確認できるのは昭和に入ってからである。長尾地区の石炭鉱脈は、芦峯寺在住だった志鷹喜太郎氏所有地内で発見されたもので、志鷹氏が現地を売却し採掘権を登録した業者がその後試掘、開発を進めたものである。聞き取りから志鷹氏の年齢を推察すると、発見は昭和10年（1935）頃ではなかったかと思われる。また志鷹氏は粘土、陶土などの採掘販売事業も行ってたようで、この地区の地質関係に知識や経験が豊富な人物であったということである。

この時、立山での炭鉱開発を行ったのは立山鑛業株式会社（本社は名古屋市中区、資本金100万円）で、昭和12年（1937）に名古屋の資産家荒川長太郎氏（荒川長太郎合名会社社長、同社の後身は現在の株式会社アラクス）が出資して作られた会社であった⁽⁹⁾。志鷹谷の炭層は、発見者の名前をとって「喜太郎炭山」（志鷹喜太郎氏発見）と「房治炭山」（佐伯房治氏発見）と呼ばれていた。「富山日報」昭和13年12月17日付によると、「本年（註一昭和13）四月頃より試掘に着手来春（註一昭和14年春）より大々的に発掘すべき準備作業を了した」とある。当初、坑道は本坑道1本とし、順次3本に増やし、日産100トンの生産を目標として昭和14年8月から採炭を開始⁽¹⁰⁾したようである。

昭和12年には盧溝橋事件が勃発し日中戦争が拡大、石炭は重要なエネルギー資源として戦争遂行のために増産に力を入れていった。北海道や福島、福岡などの大炭田は言うに及ばず、小規模な立山炭鉱にとっても増産は急務であった。ただ、炭鉱の規模に関するデータは『鑛區一覽』には示されていない。しかも炭鉱の規模が分かる情報は国力を示す軍事機密になったためか、『鑛區一覽』は昭和18年（1943）を最後に以降刊行されていない。北日本新聞が昭和19年1月に立山炭鉱をルポして書いた戦意高揚の記事「石炭戦線 立山炭鉱現地報告⁽¹¹⁾」（写真3）でも、生産量は言うまでもなく、場所が特定できる具体的な地名、作業員の人数などはすべて〇〇で伏字になっている。石油の一滴が血の一滴であったならば、石炭もまた重要な戦略物資であり、戦争で戦う兵士に対して炭鉱で石炭を採掘する男たちは「石炭戦士」と呼ばれた時代であった。

ここまでの経緯を整理すると、荒川氏が出資した立山鑛業株式会社が志鷹谷の石炭を最初に商業ベースで採掘していたことがわかった。創立時の社長には荒川氏と同じ名古屋の資産家山内卓郎氏が就任している。当時荒川氏は様々な会社への投資を行っていたが、その中でどのような経緯があって立山の石炭生産に投資することになったのか、その関連を示す資料は見あたらなかった。ただ、荒川氏は製薬会社ノーシン本舗の社主であり、製薬業を通じて富山とのビジネス上の関係が出来ていたのかも知れない。また同社が、室堂に建立された大きな石塔（供養塔）を寄進していることも富山との何らかのつながりを示すものと思われる。他にも、専務で荒川氏の娘婿勘五郎氏が富山薬学専門学校（現在の富山大学薬学部的前身）の出身（昭和2年卒）であり、のち昭和23年に中京山岳会会長を務めたアマチュア登山家であったこと、内山氏の先祖は代々地元愛知で醤油醸造業を営んでおられた⁽¹²⁾が、同地が近世から立山信仰の重要な布教先であったことなども、立山との何らかの縁が推定される要素と思われる。これらの関連については、立山と愛知三河地域との繋がりに関わる今後の諸研究の成果を待ちたい。

立山鑛業株式会社は『鑛區一覽』によると、昭和14年から17年にかけて1,065,100坪の鉱区での試掘を行い、その内49,600坪の鉱区から石炭を採掘していた⁽¹³⁾。同社はその他にも大山地区でもアンチモンや亜鉛の試掘も行っている⁽¹⁴⁾。この背景にも戦争遂行のため新たな鉱脈や炭鉱の開発を促す政府の要請があった訳であり、富山に限らず昭和16年（1941）頃からは各地で鉱物資源の試掘が盛んに行われるようになる。こ

の頃から『礦區一覽』では、試掘申請業者を記す紙面が急に厚くなっていることがその証左である。

それに連動するように、立山炭鉱の附近でも大辻山で、ほぼ同じ時期に磁鉄鉱を開発する「大日鉱業組合」が作られ、生産された磁鉄鉱は索道で藤橋駅に運ばれ、多くは不二越鋼材工業（現在の株式会社不二越）に売却されたと伝える新聞記事も見られる⁽¹⁵⁾が、聞き取りでは、石炭の他に芦峯地内での磁鉄鉱の生産について覚えている方は誰も無かった。

不二越鋼材工業では、昭和12年頃から戦争の進展に伴う原材料の安定確保や、輸送、従業員の食糧確保などのために、それに関連する業種の企業への投資や子会社化を進めていた。企業活動のためには鉄鉱石の確保も重要なことであった。その、出資した会社の中に「不二越鉱業株式会社」の名が見える⁽¹⁶⁾。立山炭鉱を経営した会社、経営者、資本関係は終戦を挟んで代わっており、石炭の採掘や販売に関係すると思われる同社以外の会社の存在⁽¹⁷⁾が見えるが、それらとの資本関係あるいは企業系列は、断片的な資料からでは不明な点が多い。

結論を先に書くと、炭鉱の操業が停止された昭和24年（1949）に立山炭鉱を経営していたのは不二越鉱業株式会社で、社長は二口孫一氏であった⁽¹⁸⁾。二口氏は昭和20（1945）年2月に合併により不二越鉱業株式会社の経営者となる⁽¹⁹⁾。当初同社はすぐに立山での石炭採掘事業に関わってはおらず、立山炭鉱には少なくとも昭和21年（1946）5月までは別の経営者がおり⁽²⁰⁾、当時の社名は「立山礦業株式会社立山礦業所」であった。地元では志鷹谷の炭山、立山炭鉱など様々な名前では呼ばれることもあったようだが、これが正式な事業所名であったことが分かる。

結局、不二越鉱業に採掘権の移るのが昭和22年（1947）1月であった⁽²¹⁾。同社が立山での炭鉱経営に乗り出したのはこれ以降のことで、閉鎖時の事業所名「不二越鉱業株式会社立山礦業所」となったのは昭和22年2月以降となるが、それ以降の立山礦業の企業活動について、会社の存続も含めて詳細は不明である。

2-2 採掘した石炭の質、出炭量

2-2-1 炭質

採掘された石炭の質について、聞き取りからは異口同音に「採炭された石炭は低質で、燃やすと煙がひどいもの」ということであった。石炭の質について、普段使いした立場で書かれたものは、炭鉱が稼働していた頃を芦峯寺で過ごした佐伯泰正氏が、当館広報紙のコラム⁽²²⁾で「(前略) ちなみに、立山炭鉱の石炭の質はもう少しで、地元では『最良の石炭が無煙炭なら芦峯の石炭はモエン炭だ。』と揶揄されていました。」(下線は、引用者)と書かれた一文である。

この一文からは、地元での石炭をめぐる見方や状況が見える。当時、燃料としては炭焼きが行われており木炭の使用が一般的だったようで、聞き取りでは、立山炭鉱で産出した石炭は地元ではほとんど使っておらず、燃料として消費されていたのは限られたごく一部だったようである。次に、「モエン」の見方である。無煙炭は炭素含有量が多いため揮発分が低く却って着火しにくいので、もしそのような高品位のものが出回っていたのならば、なかなか着火しなかった可能性もある。しかしこの地区の炭層は地質的には総じて熱量が低く低品質なものであったので、「モエン」とは石炭自体に水分が多いなどで着火が悪く、また燃えても十分な火力が得られなかったという、石炭の熱量不足の意味とも思われる。モエンは「無煙」との語呂合わせであるが、他産地の良質の石炭に対して芦峯の石炭は使い勝手が悪かったという意味の揶揄だったととれよう。尤も、もしかしたらそれはボタ山から拾った選鉱ではじかれたようなものであった可能性もある。加えて、立山炭鉱の石炭は灰分が多いので燃焼後の廃棄物も多かったものと思われる。

他方には、以下の①～⑥のような、良質であったとする記述も複数見られる。

管見した戦前から戦後の新聞記事で報じられるもの、特に戦前のものは「高品質な石炭層が広がっている」

とするものが多いようである。特に④では、記事の他の部分では炭鉱の位置、人数、生産量などが〇〇と伏字になっているにも拘わらず、炭質が優秀であること（下線）を示す部分にのみ数値が出ているあたりは、戦時プロパガンダの要素も否定できない（下線は、引用者）。

- ・①【北陸タイムス 大正8年7月4日付】
（前略）炭層は何れも七八尺の深さに亘り炭質亦よき優良無煙炭なる事東京に於て証明せられ（後略）
- ・②【富山日報 昭和13年12月17日付】
（下山した、立山志鷹谷炭鉱の坑夫の談として）九州より専問の炭鉱坑夫は三十名程来て居りますが多年経験の坑夫での話ですが該炭鉱はもつとも優秀で無煙炭です 将来五十ヶ年間^(ママ)掘り尽くせない炭鉱だと驚嘆して居りました。（後略）
- ・③【富山日報 昭和14年7月27日付】
（前略）この炭鉱の非常に有望な点は炭が第三紀層の侏羅層に属し日本では最古のものでカロリーは七千五百撫順炭に比せられる優秀なものであるのみならず採炭上頗る便利なのは三尺と七尺の両炭層を水準に掘進して行けるので排水通風施設など簡単にすませるわけである、（後略）
- ・④【北日本新聞 昭和19年1月21日付「石炭戦線 立山炭鉱現地報告 上」】
（前略）しかもその掘りあてた鉱脈は優秀な無煙炭脈で、厚さ四尺三寸、幅六尺乃至九尺といふ素晴らしさである、無煙炭を産出炭鉱は内地には殆どない、従来は全く朝鮮に依存して来たみたのである（後略）
- ・⑤【北日本新聞 昭和19年1月23日付「石炭戦線 立山炭鉱現地報告 下」】
（前略）この炭鉱は若いのでそれだけに未だ十二分の選炭設備が整つてゐないので販売上や、不利は免れない、熱量は最高七千から最低四千五百*単位迄ある、これに十分の選炭設備が出来れば僅かにまぢる低熱量の品物を除外出来るから有利であるが、現在のところ平均熱量五千五百単位内外として塊炭は十級、粉炭は四種十級の規格で、統制配炭機関へ渡されてゐるわけだ、（後略）*単位= Kcalに相当
- ・⑥【北日本新聞 昭和24年5月21日夕刊】
同炭鉱は戦争中優位と呼ばれ採炭にピッチをかけていたが、（中略）同鉱は現在五百一千トン（月産）の無煙炭を採つてゐるが今度の公団改正法案によれば炭価がメリット建になるため四千*カロリー以下の低品位の炭はコストが下げられ（後略）*カロリー= Kcalに相当

①や②は掘った石炭の炭素含有量を分析したり、灰分や硫黄分、含有水分等を計ったりすればはっきりすることである。炭質は炭層全体に一様ではないだろうから、部分的に高品位な無煙炭に近いものが採掘されたという可能性はある。「平均熱量五千五百単位内外」というのは、燃料用に国際間取引されている石炭の主流は6,000kcalと5,500kcalのものである⁽²³⁾ことから見て、③と⑤の最高値は熱量的には高品位ではある。但し、⑤の記述は、普通から低品位の石炭になるし、⑥の4,000カロリー以下というのは、明らかに低品位炭で、メリット建（それまでの、品質に無関係での買い取りではなく、石炭の品質に応じて炭価が異なる買い取り基準）によって低品位炭の単価を引き下げたことで中小の低品位炭鉱では、実質的に採算割れが起ること意味する。立山炭坑の、平均5,500kcal というのは、低品位炭の割合が少なくなかったことを意味するようである。

『富山県商工便覧』（富山県経済部通商観光課・工業課、昭和35）には、「立山炭鉱（立山町芦嶮寺）本県に炭鉱のうち石炭を産する唯一のものである。炭層は1m程度のものが2枚あるが、東方に薄くなり、また灰分が多いために余り歓迎されない。」とある。灰分が多いのは、熱量が低いため多くの石炭を消費し、燃えかすもまた多いことで、良質なものと見られてはいないことになるだろう。

旧日本石炭協会（現一般財団法人石炭エネルギーセンター）が昭和25年に刊行した『石炭統計総観』収載の「炭田調査表」（昭和24年日本石炭協会調査による）には、

富山

炭鉱数及び主要炭鉱名：2、立山
 地質年代及び夾炭層厚さ：中生代白亜紀 200m
 炭田の広さ：※（空欄・記載無し）
 炭層数及び炭丈：5層0.16～0.90m
 炭質発熱量：半無煙 5,500 (cal)
 用途：同上※（註 - 「石灰焼用」を指す） 家庭用
 埋蔵炭量：※（空欄・記載無し）
 出炭量（昭22年度）：6,155 (吨)
 坑内深度傾斜：最高350m／平均角65°
 開炭方式：水平

とある。炭質が「半無煙」というのは、昭和23年当時の炭田探査審議会が作成した、燃料比（固定炭素／揮発分）を元にした分類で、4～9以下を示す。燃えやすい瀝青炭では1前後、無煙炭では9以上という分類になる。燃料比が上がると燃えにくくなるので、無煙炭自体は着火しにくい（燃えにくい）。立山の石炭には、着火しにくいものや燃やすと多くの灰が残って使いにくいものが混在していたもので、全体として家庭用に用いられた中には低質のものも多かったが、一部産出した高品位に近い物は、市場の需要を満たす価値を以て知られていたということであろう。比較的質のよいものは、前掲炭鉱調査表に従えば石灰焼用に、その他は家庭用として地元などで販売されたものもあったのではないと思われる。用途が「石灰焼用」とあるのは、対岸の大山地区では明治時代から石灰石を産出し、石灰を焼いていたことや⁽²⁴⁾、昭和12年には小見にセメント工場が誘致された⁽²⁵⁾ことも、石炭の需要と関連していたと見られる。

後述する石炭政策転換による配炭公団廃止に伴った自由販売により、4,000kcal以下の低品位石炭の価格が下落し、不採算のため中小炭坑が閉鎖に追い込まれた。そんな中で、立山炭鉱もまた不採算のため閉鎖したことを考えると、一時期には高品位炭の生産があったとしても末期は高品位石炭の産出が減少し、10年あまりの採炭の歴史の中では、亜炭に分類されるような概ね「灰分が多く、あまり歓迎されなかった」石炭を産出していたと思われる。

2-2-2 出炭量

商工省鉱山局がまとめた年度毎の『本邦鑛業ノ趨勢』には「主要鉱山別産額」の付表が添付されているが、主要鉱山とは年産10,000トン以上を指しており、立山炭鉱はこれに含まれないので、生産が始まってから終戦までは炭鉱単独では生産量の統計が見えない。戦後になって明らかになったものを示すと、前掲『石炭統計総観』の「昭和23年度炭礦別出炭および労務者数」表に次のような統計数値がある。

炭田別または府県別：富山
 炭礦名 立山
 出炭高 7,240吨
 24年3月末労務者数：142

県内では、これ以外には炭鉱の記述はない。前述の◎【北日本新聞 昭和24年5月21日夕刊】で引用した中にある月産500～1,000トンというのが、今回立山炭鉱の出炭量に関して、最後に確認できた記録となる。単純に12倍すれば年間6,000～12,000トンの出炭があったと推定される。

2-3 休山から閉鎖

日中戦争勃発以降の石炭政策により、戦時体制下の戦略物資として石炭の増産が図られた。それにより戦時中の出炭量は昭和15年（1935）には5,647万トンでピークとなる。それ以降は、石油の輸入が止まり、

対米戦争遂行のため需要は増加し増産が叫ばれていたが、熟練労働者や生産資材の不足のために生産量は減少した。一方で新たな試掘数は増加し、資源の確保に力が注がれた。終戦直後もこの傾向が続く。戦後は経済復興のため、政府による「傾斜生産方式」によって石炭の生産に資材、労働力、資金が集中投下される。戦争中に国策で増産が叫ばれた炭鉱は、終戦直後も増産を目指していた。石炭が黒いダイヤといわれていた時代である。そのため、石炭の生産量は昭和21年には2,038万トンまで減少するが、翌22年には2,723万トン、23年には3,373万トンまで回復した⁽²⁶⁾。それに併せて、戦後も新しい坑道の開発、生産増加が図られていた。立山芦峠寺小学校に残る記録『沿革史 第四輯 芦峠校』（以下、『芦峠小沿革史』）によると、立山炭鉱では昭和22年11月18日には新坑発掘祝賀会が開かれており⁽²⁷⁾、地方の中小の炭鉱でも、傾斜生産方式下で石炭生産の続伸が期待されていたことがわかる。

販売面でも同様であった。戦時中石炭配給統制法によって作られた日本石炭株式会社が炭鉱毎の買い入れ基準価格を定め、それに炭鉱の適正利潤を考慮して買い入れ価格を定めて一手に買い取ったあと、石炭の品位別に一律の統制価格で販売された。戦後は、昭和21年には配炭鉱団が日本石炭に代わり一手に買い取る、統制価格販売を継続した。その生産面でも昭和23年には、炭鉱は国家管理となって保護されながら生産量が回復していった。

しかし、昭和24年には政府の方針が一転し、9月には配炭公団、炭鉱の国家管理が廃止される。それまで政府は、政策上消費者炭価を低く抑えるため買い取り価格よりも販売価格を安く設定し、その差額は国費で補うことで中小炭鉱でも経営が成り立っていた⁽²⁸⁾。しかし、カロリー建（品位によって買い取り価格に差を設ける）とすることで、結果として低品位炭はコストが下げられ、販売も統制価格ではなく自由販売となった。そのため、低品位炭は売値が下落し、採算がとれなくなるケースが多くなった。同時にアメリカからの安い無煙炭が輸入されるようになった影響を受けて昭和24年度には全国で200を超える中小炭鉱が休山、廃坑に追い込まれていった。

この政府の方針に反対して立山炭鉱ではストライキを行った。しかもそれは、大変に珍しい「労資一体」のストであった⁽²⁹⁾。労使一体という形態はなじみがないが、ロックアウトとストが共同歩調で進められ、共同戦線を張って配炭公団（高岡支局）と交渉するという作戦だったようである。これによって立山炭鉱は実質的に操業停止となり、再開されないまま休山閉鎖したものと見られる。このことが新聞で報じられた5月21日はストライキの最中であった。突入の日時について記述はないが、翌日の「北日本新聞」5月22日付には「退職金は増産で／立山炭鉱組合申入れ」の見出しで、炭鉱労組と会社側の団体交渉の一件が報じられている。

（前略）会社側では三十日分の解雇予告手当を与え従業員百八十名の内六十名を廃す縮小企業継続案をさきごろ発表した。組合側はこれは会社側復金債務および退職金負担をのがれようとする口実に過ぎず、一たん閉鉱の上退職金など支給すべきものを支給したのち再開し、退職金はわれわれでつくるから資材一切を貸与せよと申し入れ、本月中に千トン（現在七百五十トン）を出炭、一人あたり約二万円を目標に作業中である。

とある。労使一体のストから、閉鎖をめぐる労使交渉になっていったようである。

管見した中で立山炭鉱について記された最後の記事は、この約二ヶ月後「北日本新聞」昭和24年7月26日付夕刊「富山県下の地下資源を探る」と題した記事で、石炭についての展望を述べた中で「立山炭山は目下休業中である」という部分である。7月末までは、全く生産が停止していたか、あるいは会社側が資材貸与に応じて、細々と生産をしつつ再開を目指したものと思われる。このストの結果は報じられていないが、結局炭坑は再開されないまま翌年の1月までには閉鎖⁽³⁰⁾に至ったものと見られる。

この後、時代の趨勢はエネルギーの主役を石炭から石油に変え、原子力の言葉も出はじめている。昭和24年以降の新聞記事では石炭に関する内容はほとんど目にしなくなり、それに代わって天然ガス、石油の試掘、生産が目前といった報道が行われたり、立山町目桑地内でウランの試掘の申請が出されたという、時代を感じさせるような内容が報じられたりする⁽³¹⁾。

3. そこで暮らした人々の生活

3-1 芦峯国民学校長尾分教場の設置

炭鉱のあった長尾地区は芦峯寺の中心からも6km近く離れた、石炭を掘るために作られた村で、住民のほとんどすべてが炭鉱の関係者であった。生活に必要な物資は後述する索道を用いて運搬されていたが、働き盛りの炭鉱労働者が所帯を持って生活しているのも、当然その子どもたちに対する教育は当初から重要な課題となった。児童たちは村立芦峯国民学校（昭和22年に芦峯小学校と改称。当時の所在地は、現在の芦峯公民館の場所に当たる）まで徒歩で往復12キロの道のりを歩いて通わざるを得ない状態だった。終戦までは、これに対して特に対応策は取られていなかったようであるが、戦後になると芦峯国民学校の長尾分教場が作られ、炭鉱で働く労働者の子女への初等教育も行われるようになった。この長尾分教場の存在もまた立山町の教育史にも見えない、わずか3年9ヶ月あまりで立山炭鉱と運命を共にした数奇な学校であるが、それは言い換えれば戦後日本の石炭政策と運命を共にしたということにほぼ等しい。

分教場は、行政（立山村）からの提案ではなく、炭鉱側からの陳情によって設置されたものであった。戦後も石炭の増産が図られ炭鉱労働者が増加していること、戦後教育の発足直後でもあり教育基本法が制定され教育の機会均等が重視されていったことも後押ししたのであろう。鉱山側（立山礦業所長）から立山村、富山県への陳情を経て昭和21年4月25日に県から分教場の位置を立山村長尾四番地に指定を受け4月30日に設置が認可され、5月1日に立山礦業所の社宅の一部を借りる形で分教場が設置された。教室は10.5坪、その他の教室5坪、校地104坪で、生徒数は15名であった⁽³²⁾。

『芦峯小沿革史』には、分教場の開設について、

数年前から当校下芦峯寺長尾に石炭採掘事業を立山礦業所が経営していたが終戦後も石炭は重点産業として其の増産の必要愈々加重せられるようになり採掘従業者の子女の教育の完璧を期するのは教育の機会均等の上からも従業者をして安んじて増産に精進するを得させる上からも肝要なことに贅語を俟たないこととなった。ここに於いて立山礦業所中心となり縣及村の了解を得て常設分教場設置の運びとなった。（中略）新緑の五月二十九日長尾分教場開校のはこびとなったのである。（中略）不就学

にひとしかりし僻陬の児童も聖代の恩沢に浴すことになったのである。

と、高揚感をもって書き記されている。授業は教員1名による複式で行われた。その任に当たったのは校長より俸給号級の高い老練な教員ではあったが、現地に住み込んで炭鉱の村の中で一緒に生活していた⁽³³⁾。当然先生と子どもたちに距離はなく、親密でのどかな学校生活を送られていたのだろうと想像される。

聞き取りの中にあつた生活の思い出では、長尾には診療所があり、地元芦峯寺出身の看護婦（師）が勤務していたが、芦峯地区住民の健康管理も兼務しており、病人が有ったときには芦峯寺へも来てペニシリン注射などを打たれたのを覚えているという話。芦峯寺の青年団が炭鉱で慰労会をやるのに、みんなで楽器を担いで山道を歩いて行った、という思い出話も出て、炭鉱の村は決して閉鎖された孤村ではなかったことが読み取れる。炭坑銘板を保管しておられた志鷹氏は「炭山の村は規律があり、みんなが助け合って和気藹々と暮らしやすく非常に楽しかった」と生前回想していたということである。

そんな生活の一コマとして『芦峯小沿革史』には、本校（芦峯小学校）と同校千垣分教場と3つの学校で合同運動会が開かれた記録が残っている。聞き取りでは、「遠足で本校から長尾分教場まで山道を歩いて行ったが、途中で大雨に遭ってしまい、帰りは家から迎えに来てもらった」という話もあった。また、担任から石炭の重要性を聞いた子どもたちが自治会を作り、山道を整備したり夜には防火のための夜回りを自主的に行ったりして、「国家の大切な資源である石炭をほる人たちに心おきなくはたらいてもらおう」と奉仕をしたことに対して、「村の人たちも限りなく感謝しています」と結ぶ記事が美談として新聞に載っている⁽³⁴⁾。

児童数は22年度には23名に、23年度には最大39名に増え学級数も2クラスになったが、炭坑がストライ

キから休鉱状態になると、だんだんと鉱夫が山を離れているためか児童数が減少し、その年度末には21人に減っている。

昭和24年には前述の石炭配給公団の解散など、石炭をめぐる国の政策転換の影響を受けストライキを打つが事態は打開しなかった。9月15日をもって配炭公団は廃止が決まり、中小炭鉱の合理化が進み、昭和24年4月から25年1月までに全国で209の炭鉱が休廃止になった⁽³⁵⁾。立山炭鉱もその合理化の煽りを受けて閉鎖されるが、その日時を明確に記録した資料は管見できなかった。昭和24年度には、炭鉱がストライキに入り会社としての出炭が停止した中で、退職金分の出炭を会社側が認め生産が細々と続けられたのか、或いはストライキ休坑から閉山へ向かうのに伴って、分教場も閉校が決まる。分教場の閉鎖は昭和25年1月20日だったと見られる。

『芦峯小沿革史』には、「業界亦産業合理化の一路を邁進し品質の向上と価の低廉尊ぶるに至り我が長尾の炭山もかかる諸事に敗北し閉鎖の止むなきに至り之と同時に長尾分校も昭和二十一年五月創校、開校以来満二年九ヶ月にして（閉校昭二四・一・二〇⁽³⁶⁾）閉校の止むなきに至る」と記されている。そして、翌年度の芦峯小学校（本校）の在籍児童数が大きく変化していないことから、長尾分教場に通っていた児童は、そのほとんどが炭鉱閉鎖後には芦峯寺を去ったものと考えられる。

4. 石炭の輸送

4-1 芦峯寺駅

石炭は、輸送のために作られた索道を使い、それにトロッコ（鍋トロ）を提げて運んでいた。索道の支柱は丸太を組んで作った所や、トロッコには木製の物もあり、聞き取りでは、「人は乗車禁止であったが中に入ったり、石をぶつけて遊んだりした」、「木製トロッコには蜂が巣を作っていた」、などの思い出話も聞かれた。

索道のルートは、炭山のある志鷹谷付近から常願寺川の上を越えて、旧大山町（以下大山側）に敷設された鉄道の駅に運んで、そこから富山方面へ送られていた。その石炭を運んだ先が「芦峯寺駅」であった（写真4）。大正12年に千垣まで開通していた富山県営鉄道が延長され粟巣野まで開通したのが昭和12年10月のことで、この時に千垣駅の先に「小見」「本宮」「芦峯寺」「粟巣野」の4つの駅が作られた⁽³⁷⁾。「芦峯寺」駅の場所は、現在の本宮駅より立山寄り、与四兵衛山の西側であった。実質的に石炭搬出と、炭鉱の村への資材輸送以外に利用されなかった駅であったためその存在はほとんど知られていない。現在、かつてのホームの一部痕跡が仔細に眺めれば電車の車窓から見えるようだが、藪の中を歩くことに不慣れでは到着が困難な位置にある（写真5、6）。

線路は、立山方面へ向かって千垣を過ぎて、線路は常願寺川を鉄橋で渡り大山側を通っている。大山側にあるのに、なぜ駅名が対岸の地名「芦峯寺」となったのか。これには2つの話がある。

1つは、このルートに決まったのは県が有峰ダムを造る資材を運搬するためであったと言われるが、その際にルートを外れる対岸の芦峯寺では猛烈な反対が起こった。しかし結局、小見一本宮―粟巣野間は称名発電所への建設資材運搬軌道を利用して線路が作られた。この時、大山側にありながら対岸の「芦峯寺」が駅名になった理由は、その時に県が芦峯寺の対岸に停留所を設けること、本宮と志鷹谷付近、小見鳥越山と芦峯寺庚申塚付近に橋を架けることを約束して和解したという経緯からだと言う⁽³⁸⁾話である。しかし財政上の理由で橋は架けられず、芦峯寺住民の利便を図る前提であれば不自然なままであった。

もう1つは、芦峯寺側から石炭を運ぶために作られた駅だから「芦峯寺駅」となった⁽³⁹⁾という話である。しかし、石炭の生産が開始され、実際にこの駅から石炭の搬出が始まったのは昭和14年の8月から、炭鉱から駅まで石炭をおろすための索道が架設され試運転が行われたのも7月になってからである⁽⁴⁰⁾。昭和12年の開通時には商業ベースで石炭の採掘も試掘も行われていないので、将来的な採炭開始を見越して貨物駅を先に作ったとは考えにくく、駅が予め石炭の搬出を目的として設置されたというのは不自然に思われる。

この点は、芦峯寺駅の設置に関する鉄道免許の記述から事実が見える。昭和12年に駅が作られたとき、芦峯寺駅は「停留場」であったが、昭和14年には停車設備を変更して「停車場」になっている。法律上は、分岐点（ポイント）の有無で区別したとき、分岐点が無いものを「停留所」と区別される。設置当初は分岐点のない単線に電車が止まる駅であったが、昭和14年に索道からの石炭を積み替える場所とそのため貨物用の側線を敷設し、分岐点を設置してレールを切り替え、「停車場」としたことが分かる。昭和14年3月に信号や分岐点を作るに当たって鉄道省へ変更を申請し、認められている⁽⁴¹⁾。そして、その申請理由は「立山鉱業会社採掘炭ノ輸送ヲ便ナラシムル為」とあった。しかもこの工事にかかる工費14,100円は立山鉱業の寄付によってなされていた。停車場の竣工は昭和14年8月25日で、操業生産が始まってまもなくであった。鉄道省への申請理由には、

現在芦峯寺停留場ハ乗降客並取扱貨物ハ極メテ尠キモ今般立山鉱業株式会社ニ於テ本停留場ノ対岸、立山村芦峯寺地内礼拝田山ニ於テ石炭採掘ノ計画ヲ以テ目下全鉱区ヨリ当駅迄架空索道工事施工中ニシテ、該工事完成（昭和十四年三月ノ予定）ノ上ハ毎日平均100吨出荷ノ予定ナルヲ以テ、之ガ荷捌キヲ円滑ナラシム様当停留場ヲ改造セントスルモノナリ 即チ側線延長100米ヲ敷設シ「ポイント」2ヶ所新設シテ停車場ニ変更スルモノトシ、（以下略）

とあり、ここからは、昭和12年に芦峯寺駅ができた当初から「旅客」と「貨物」が取り扱われていたこと、索道の架設は芦峯寺駅からの石炭輸送計画と同時に進められたこと、炭鉱の生産計画では日産100 t の生産が予定されていたことが分かる。

つまり、当初は将来的な対岸との架橋を前提に旅客の駅として設置しているが、橋の開通が見通せず旅客駅としての利用価値が低かったこと、そして昭和14年に石炭生産が始まることに伴って、その円滑な輸送用に分岐点などを設置して石炭積み出し可能な駅になったということである。列車のダイヤが確認できないので旅客駅として機能していたのかどうかは、大山側での聞き取りは出来なかった。また、芦峯寺の聞き取りの中では、芦峯寺駅で電車を乗り降りしたという話は聞けなかった。戦前、宿坊家では千垣まで電車で来た客を迎えに行ったという話からは、芦峯寺の最寄りの駅は当初から現在と同様千垣駅であった。予定の橋が架からないままでは、鉄道を大山側に敷設することの条件であったはずの芦峯寺駅での旅客の利便性はなかった訳である。

また駅の廃止年代の特定も出来なかったが、索道線が稼働しているうちは駅自体も機能していたと思われる。そして後述する索道線のルート変更や炭鉱が休山したことで実質的にその役割を終え、通常運転でこの駅が使われたか否かは分からないが千寿ヶ原までの路線が開通する前後で廃駅になったものと考えられる。

炭鉱から芦峯寺駅までの索道架設の年代は確認できた。そして芦峯寺駅と志鷹谷の立山炭鉱間で常願寺川を跨ぐとすれば、最も川幅が狭いところを結んだと考えられるが、支柱の設置跡や写真が残っておらず実際にどのルートで常願寺川の上に架けられていたのか未詳である。かろうじて規模や運用の実態を示すものとしては、「北日本新聞」昭和19年1月23日付「石炭戦線 立山炭鉱現地報告【下】」には次のようなレポートが載る（○○は伏字）。

選別を終った石炭は直ちに○○○馬力の大電動機によつて運転する高架索道運搬車で○キロに及ぶ長距離間を鉄道線まで運ぶ、○○糶の太い鋼線に巧に乗つて行く“鍋トロ（註—無蓋トロッコ）”の陸続と天空を切つて運び出される様は胸のスク程勇ましいものである。黒ダイヤを下界へ運ぶ高架索道運搬車の性能は現在一時間○○トンであるが、これは生産費のうちの輸送費節約の親玉である。

今回の調査の中で索道の支柱が写っている写真を見ることができた。昭和21年の分教場の開校を伝える新聞記事で、校名の看板を持つ児童と担任が並んでいる写真の後方には、索道を通した塔らしいものが写っているのが分かる（写真8）。

4-2 小見方面への索道の架設

石炭搬出用の索道のルートを聞き取る中で、芦峯寺駅へのルートの他に、現在の立山青少年自然の家の近

くを通過して、須頃から芦峯ふるさと交流館の上空付近を通過する索道の存在に触れた話があった。須頃には索道の中継所があり、当時のコンクリート製の土台が部分的に残り、当時は丸太を組んで支柱にしていた部分もあったという話が出た。長尾からこちらを迂回して芦峯寺駅へ向かうことは考えられず、当初は芦峯寺駅へ石炭を搬送する索道が架けられていたが、その後、距離的にも長くなるが何らかの理由によりルートを変更して小見駅方面に石炭をおろす索道も作られていたようである。

しかし聞き取りでは、その時期や期間についての記憶は断片的で、確認はできなかった。このルートの索道が作られたことを当時の状況から推定するならば、その要因に考えられるのは明治から続く大山地区で産出する石灰石を焼いて石灰を作る産業の趨勢や、小見駅が作られることで誘致し、昭和12年6月に小見に46,000坪の工場が建設され、13年9月から操業を開始した富山セメント株式会社の存在である。何れも石炭とは非常に関係の深い産業である。工場建設と同時に、小見駅からの引き込み線も敷設された⁽⁴²⁾。

この地区での工業化の変遷を立山炭鉱での石炭生産が始まる前後から追うと、富山セメントは昭和14年4月にはセメント生産に伴う塵埃発生問題から防塵器の設置まで操業を停止する。しかも停止中にセメント製造設備を満州に転出し実質的にセメント製造は廃業する。その後同社は不二越鋼材工業と提携して製鉄事業への転換も模索するが、結局、立山精錬株式会社を設立して当初はカーバイドの製造、のち鉄合金を生産することを計画する⁽⁴³⁾。近くから石灰石の供給が可能であるから立地としては十分であろう。

ここで、ルート変更の時期について2つの仮説が立てられる。一つは、そこに芦峯寺からの石炭の供給の必要性があって、早い時期にルート変更がなされたのではないかということ。もう一つは、昭和22年11月に撮影された空中写真からは、小見附近では、広い空き地は見えるが大きな工場群は見当たらないよう（写真9）であり、立山精錬の操業が早い時期に終了してしまい、貯炭のための土地確保が可能で小見への出炭の必要性があったのではないかと、ということである。不二越鋼材工業が立山炭鉱を買収した目的には不二越鋼材工業での自家用炭の確保にあった⁽⁴⁴⁾ことを見ると、炭鉱から大量の石炭を富山市内の工場に輸送するための必要から索道の付け替えが行われた可能性もあるが、詳細は今後の研究に委ねる。

まとめにかえて

今回の調査で分かったのは「石炭」をめぐる人、資金、インフラ、政治、戦争の関連の複雑さである。そこから垣間見えるのは、日本近代化の流れは単に産業開発の歴史にとどまらず、近代史がエネルギー資源の生産や分配をめぐる戦争や政策に翻弄されてきたのと同じ展開を、芦峯寺の立山炭鉱もまた持っていたということであった。そして、立山炭鉱をめぐる事実関係は、わずか70年程前のことでありながらまだ不明な点が多く、今回の調査で全容が明らかになった訳ではない。

今後この点は、芦峯寺に炭鉱があったという事実の調査だけではなく、昭和前半の産業構造の変化、交通と物流の変化などの面から地域史解明の上で重要な視点となると思うので、今後明らかにすべき点とその必要性を指摘しておきたい。

明治以降、殖産興業政策の中で立山山域の地下資源の調査がどのように進められたのか、そしてそれを開発する動きがいつ頃からどのように、誰の手によってなされたのかを明らかにすることは、富山の近代化、工業化を多層的に知る上で明らかにする必要であろう。それは交通史とも関連することで、立山への鉄道敷設に関連して、立山地域での、石炭に限らない硫黄やモリブデン、黒鉛、石灰石などの資源開発の実態が明らかにされる必要がある。また、炭鉱からの石炭輸送ルート、芦峯寺駅廃駅の時期の確認、対岸の小見地区の工業化、電力開発との関連など、資料の発掘と確認が必要な部分が多い。加えて、それらについての文字や写真が残されない部分を、聞き取りによって情報の隙間を埋めていくは喫緊のことである。

情報のご教示をいただけたら幸いです。

【謝 辞】

小論の執筆に際し、次の皆様にはお忙しい中、情報提供等に多大なご協力いただきました。(五十音順)
青木ムツミ氏、齊智聖子氏、佐伯亀雄氏、佐伯すみよ氏、佐伯千代恵氏、佐伯哲也氏、佐伯信春氏、佐伯光久氏、佐伯元信氏、篠崎貞子氏、清水正明氏、野口安嗣氏、平野弘子氏、平野稔氏、堀田茂輝氏、間野 達氏

特に佐伯哲也氏には、聞き取り協力者の連絡などに格別のご協力をいただきました。

また、次の企業・団体等から、レファレンスに回答をいただくなど貴重な情報のご提供をいただくとともに、関係資料収集と閲覧にご便宜を図っていただきました。(敬称略・五十音順)

一般社団法人日本石炭エネルギーセンター、株式会社アラクス、株式会社不二越、経済産業省中部産業経済局資源エネルギー環境部鉱業課、国土交通省国土地理院北陸地方測量部、国立公文書館、立山町立芦峯公民館、立山町立立山図書館、立山町教育委員会(立山芦峯小学校・休校中)、鉄道雑学研究所北陸支所(web)、富山県議会図書室、富山県立図書館、富山市公文書館、名古屋市鶴舞中央図書館、日本地図センター

ここに皆様のお名前を挙げて感謝申し上げます。

【註】

- (1) 富山大学大学院理工学研究科の清水正明教授の分析、ご教示による。
- (2) 昭和14年に鉱区として採掘権が登録された際の鉱区図では、鉱区面積496,000坪のうち14,2500坪が立山村大字芦峯寺小字志鷹谷、小字野新谷に、353,500坪が東谷村大字城前小字池ノ谷に跨がっている。
- (3) 地図：図名「五百石」測量年1957 1959/09/30発行。空中写真：整理番号 USA コース M 646-No 2 1947/11/13撮影
- (4) 『5 萬分の1 地質図幅説明書 五百石(金沢一第29号)』(工業技術院地質調査所、昭和35) III. 3 石炭 の項参照。
- (5) 『雲根志前編』卷之二には「諸国に多し。(中略) 山中に掘りて得て貧民薪木に用ゆ。」とした後に、美濃国本巢郡養老村、相模国鎌倉油井濱、上野五料、越中立山、紀州熊野、尾張、伊勢、志摩などに出づ。」と挙げている。近代になって炭鉱が大規模に開発された筑紫(三池炭鉱)や磐城(常磐炭鉱)が挙がっておらず、燃料としての価値や生産量の多寡ではなく、本草学・弄石趣味から木が地中で変化し燃える石のなったことの妙からの記述である。山口彌一郎「炭礦民俗誌稿」(『燃料協会誌』第14巻4号、1935)参照。
- (6) 田賀井篤平編『和田鉱物標本』(コレクション XI 東京大学総合研究博物館、2001)参照。明治初年、当時の文部省が殖産興業を目的に全国で有用鉱物調査を行い各府県から鉱物標本を徴収し、東京の金石取調所で和田維四郎らがその分析を行った際、サンプルリストは内務省博物館に保管され、そのリストは『博物館列品目録天産物第三 鉱物類』(博物館、明治13)として刊行された。越中からも石炭、泥炭のサンプルが送られ、同書には石炭標本の採集地として「越中新川郡長倉村字塔ノ倉」、「越中射水郡磯辺村」の記載が見られる。
- (7) 「富山日報」大正7年3月18日付「目下株式募集中なる立山礦業株式会社は富山市出身の小塚貞義氏は 地方産業の不振なるを憂ふる余り設立せんとする者なるが該事業は硫黄カーバイト二硫化炭素、曹達灰、硬質陶器原料の製造を主眼として原料は総て立山及其附近より採掘するものにして(後略)」とある。社長の小塚貞義氏は当時金沢電気軌道社長。役員には日本硬質陶器の小黒安雄、金沢電気鉄道の吉田恵が名前を連ねている。この会社の存続は、大正14年発行の『人事興信録 第7版』に前述の小塚氏が 同社の役員をしていることで確認できるが、同書昭和3年の第8版では「立山水電」、「立山物産」の役員として掲載されているが立山礦業の社名はなく、同社が企業として存続していたか否かは未詳である。
- (8) 「北陸タイムス」大正8年7月4日付「(前略) 未発の大鉱富を発見す可く技術員を東京にて募集せりと伝へらる 折柄立山の芦峯に大量無煙炭鉱発見の沙汰あり 其の位置は中新立山村字芦峯寺村地内小字 石節、大窪、寒谷、鉢、長尾、小丸山、岩原、前谷、十村谷、中野、円来寺、石動の十二部落に亘る七十六万二千六百坪の鉱区なるが今春四月頃西砺波荒川村岡の人高島□氏は多年斯業に経験を有し偶々同氏の知人なる芦峯村の収入役たりし佐伯十作氏方に寄宿しつつありたる際偶然大炭層を発見(後略)」とある。※□は判読不能
- (9) 註(7)にある同名の企業「立山礦業」との関連は未詳。「富山日報」昭和14年7月27日付夕刊「立山鑛業百万円で八月採炭開始」によれば、本社は名古屋だが、富山での諸準備の中心になっていたのは富川保太郎氏とある。富川氏は「立山石炭」の発起人でもあるので、立山礦業と立山石炭との業務上の関わりは非常に深いものであったろうことが、ここからもわかる。採炭が近づいた昭和14年度には富山出張所を電気ビルに開設して実務に当たっていた。
- (10) 『鉱業原簿』には、ここに採掘権が登録されたのは昭和14年4月17日とある。前掲「富山日報」昭和14年7月27日付夕刊「立

山礦業百万円で／八月採炭開始」参照。

- (11) 昭和19年1月21, 22, 23日の三日間連続で【上】【中】【下】を連載。
- (12) 立山礦業の社名、設立年、資本金額、荒川長太郎氏については「北日本新聞」昭和19年1月21日付「石炭戦線 立山炭鉱現地報告【上】」による。また専務の荒川勘五郎氏が富山薬学専門学校の卒業であることを紹介している。『荒川百三十年』(荒川長太郎合名会社、1982)によると出資者荒川長太郎氏は立山炭鉱の取締役役に就任している。社長の山内氏については『人事興信録 第12版 下』(人事興信所、昭和14)には、セメント、海運業など10を超える会社の社長を務める実業家であったこと、山内家は先祖代々醤油醸造業を営む旧家であったことの記述がある。
- (13) 『大阪鑛山監督局管内礦區一覽』昭和14～17年版には、毎年立山・東谷地区で951,000坪と114,000坪の鉱区で試掘を申請している。この鉱区は、昭和13年にはそれぞれ別の業者が試掘を申請していたもので、立山礦業はそれを引き継いだ形になる。大規模な試掘を行っていたことはわかるが、いずれも採掘には至っていない。
- (14) 前掲『大阪鑛山監督局管内礦區一覽』昭和15～17年に大山地区の801,700坪で鉛、アンチモン、亜鉛、硫化鉄の試掘を申請している。
- (15) 「富山日報」昭和14年5月28日付「大辻山 大日鉱業 出鑛を開始」参照。昭和12年10月に富山県営鉄道は栗巢野まで開通していたが、「藤橋」の名称の駅は路線にはないので、大正12年4月に千垣駅から常願寺川左岸沿いに藤橋まで敷設された発電工事専用のガソリン軌道の終着を指すものと思われる。そうだとすれば常願寺川右岸の芦嶺寺は通らないので、聞き取りでも芦嶺寺の人々の間では鉄鉱石の採掘の事実がほとんど知られていなかったことも頷けるが、採掘実態の詳細は未詳。大日鉱業組合による磁鉄鉱の採掘は、『大阪鑛山監督局管内礦區一覽』に記載がないので、採掘権を持っていたのは同組合ではないことは確かであるが、活動実態については未詳である。ただ、前掲『明治43年富山県中新川郡統計書』には、立山村で603,540坪の鉄採掘権所有者に賀田金三郎氏の名があり、大正14年に立山での鉄採掘権を取得している企業名に「合資会社賀田組」がある。明確な資料はないが、この両者が関連を持つ可能性は高い。また昭和14年という時期が、戦争遂行に伴う鉄の増産の必要性から古い鉄脈を稼働させたものとも考えることも出来る。以上の状況から推測すれば、大日鉱業組合というのは、この会社の出資によって地元で採掘を行う事業所として設立された組織の可能性も考えられる。
- (16) 『不二越二十五年』(不二越鋼材工業株式会社、1953) 191～192頁参照。同社が、大辻山で磁鉄鉱を生産した大日鉱業組合に出資したという記載はない。但し、不二越鋼材工業は「不二越炭業」に対しては出資する関係にあったことがわかる。不二越炭業を完全に子会社化していたかについては、現在の不二越にも明確な記録が残っていない。(株式会社不二越へのレファレンスに対する回答による教示)
- (17) 昭和12年に「立山礦業」を設立した荒川長太郎氏は、昭和14年2月に資本金18万円で、石炭その他一般炭産物の採掘ならびに販売を主目的とする「立山石炭」という会社を設立している。本社は富山市太田口町に置かれた。前掲『荒川百三十年』230～231頁参照。同社発起人は、山内卓郎(立山礦業社長・代表取締役役に就任)、荒川長太郎、荒川金一(長太郎氏娘婿の勘五郎氏(立山礦業専務)を指す)、橋本喜兵衛、富川保太郎の5名とある。富川氏は後に民選第2代富山市長を務めている。監査役には直井直治郎、志鷹喜一が就任したが、志鷹喜一氏は炭層の発見者志鷹喜太郎氏の縁者である。註(9)にもあるように、同社と立山礦業とは役員の兼務などで極めて近い関係にあったと考えられるが、炭鉱の経営に当たって両社がどのような立場にあったのかは不明である。ただ、立山石炭設立の目的に石炭その他一般炭産物の販売が挙げられていることから、採炭と販売を分けて経営していた可能性も考えられる。また『礦區一覽』によると、立山石炭も昭和15年から17年にかけて大山地区で801,700坪での鉛、アンチモン、亜鉛、硫化鉄の試掘を申請、また昭和16年からは立山・東谷でも、そして採炭中の長尾地区以外に東谷・上段地区で958,600坪の鉱区で試掘の申請を行っている。両社は荒川長太郎合名会社の関連会社として立山地区の炭山開発では協力関係にあったと思われるが、詳細は今後の研究の成果を待つ。立山石炭はその後、昭和20年9月に本社を名古屋に遷し、昭和23年に立山炭工と改称した。『名古屋商工名鑑昭和34年度版』(名古屋商工会議所編、1959)によると、同社の「業種・営業品目」は石炭、其他炭産物採掘 販売、煉炭、豆炭、加工燃料製造販売。荒川長太郎合名会社内に本社を持ち、代表取締役には荒川勘五郎氏が就いている。昭和44年に、同じ荒川長太郎合名会社系列の紀勢炭業株式会社と合併して会社を解散している。
- (18) 「北日本新聞」昭和24年5月21日付夕刊。立山炭鉱のストを報じる記事に「本県唯一の無煙炭鉱—立山炭鉱(社長二口孫一氏)」とある。また「北日本新聞」昭和24年5月22日付の、立山炭鉱労組との労働条件交渉を報じる記事では「不二越炭業立山炭鉱」の社名が使われている。
- (19) 石坂和夫「二口孫一の人と事業」(『産業と産業人』産業社、6巻8号、1958) 71～73頁参照。二口氏は、それ以前から褐鉄鉱を採掘する企業を運営していたが、当時不二越鋼材工業社長の井村氏との関係から不二越鋼材工業と資本関係

にあった「不二越鉱業」を吸収合併し、その商号を引き継いだ。

- (20) 『全国工場、鉱山、事業場名簿 昭和22年』（日本産業福利協会、昭和22）371頁参照。中新川郡立山村にあった「立山礦業株式会社 立山礦業所」は高井千壽氏が代表者、従業員数は男151名、女28名 計179名の記載がある。
- (21) 『鉱業原簿』上の採掘権移動は昭和22年1月31日。この頃、不二越鉱業は新潟県魚沼郡、新潟県村上市道羽下ヶ淵でも鉄鉱石や亜炭の生産を行うとともに、長野県下では不二越鉱業長野林業所が林野事業の展開をするなど、事業の多角展開を図っていたようである。芦峯寺での炭鉱経営も、そのような多角化の中でのことと考えられる。
- (22) 佐伯泰正「むかしあったとお～ 立山ちよっと昔の話 ②芦峯寺駅」（「たてはく」50号、富山県立山博物館、2004）
- (23) 石炭の品位分析、その基準などについては、レファレンスに対する日本石炭エネルギーセンターからの回答でのご教示による。
- (24) 前掲「北陸タイムス」大正8年7月4日付に「現に対岸の大山村の字小見村及亀谷村の石灰工場にては木炭騰貴の結果従来伏木方面より石炭を輸入し之れを焼きつゝありたるが該鉱区試掘以来其炭を購入し使用し居るが成績頗る良好なる上価格低廉なる点に於て大に歓迎需要されつゝあり」とある。実際にどの程度試掘されていたかは不明だが、大山地区の石灰工場への出荷が輸送上最も有利であることは間違いない。
- (25) 昭和13年9月に富山セメント株式会社小見セメント工場が進出する。同社は翌年12月に富国セメントと合併し、磐城セメント、住友セメントと変遷し、現在の住友大阪セメントにつながる。工場自体は、昭和16年頃には満州に移転する。
- (26) 岡崎哲二「戦後日本における市場経済への硫黄と生産性変化：石炭鉱業のケース」（『名古屋大学法政論集』260号、2015）155頁参照。栗田三郎「石炭産業の歩み」（『燃料会雑誌』第65巻8号、1986）628～629頁参照。
- (27) 『芦峯校 / 沿革史 第四輯』昭和22年分年表の記述参照。同書は、昭和16年度から昭和27年度までの芦峯尋常高等小学校・芦峯国民学校・芦峯小学校の公式な年報である。同校が年度末に学校運営や指導の記録と共に、芦峯寺地区で関連する項目をまとめたもので、同校の正史として創校以来の記録が分冊で保存されている。
- (28) 藤野豊「炭鉱合理化政策の開始と失業問題」（『人文社会科学研究所年報』No. 13、敬和学園大学、2015）21頁参照。
- (29) 註（18）に同じ。
- (30) 『芦峯小沿革史』の記載から分教場閉鎖日時は昭和25年1月20日と見られる点から推定。この日時の根拠については註（36）参照。
- (31) 「北日本新聞」昭和24年7月26日付には「富山市近郊で科学的油層調べ」の小見出しが見られる。また、「北日本新聞」昭和31年4月18日付にはウラン試掘の申請と、県が許可を出す予定であることが報じられている。
- (32) 『立山芦峯寺小学校 創校百十年の歩み』（同校創校百周年記念事業実行委員会編、昭和58）90～91頁参照。
- (33) 昭和24年度版『富山県教育関係職員録』（富山県教職員組合／富山県教育会、昭和24）121頁参照。長尾分校担当教員の住所は長尾と記載されている。
- (34) 「北日本新聞」昭和24年2月27日付「こども北日本」コーナーに「炭鉱に奉仕する子供たち」と題した立山炭鉱の紹介記事がある。
- (35) 藤野「前掲書」22～24頁参照。
- (36) 『芦峯小沿革史』にある「開校以来満二年九ヶ月にして（閉校昭二四・一・二〇）」の記載は、清書の際に年度を1年間違えた誤記で、実際は昭和25年1月のことと考えられる。『芦峯小沿革史』が小論の基本資料である点に鑑みて非常に重要な部分なので、これが誤記であると結論づけた理由を記しておく。芦峯炭鉱の閉鎖は他の中小炭鉱の場合と同じように、配炭公団の廃止による炭価下落で採算割れが主因と考えられる。配炭公団の閉鎖は24年9月なので、24年1月の分教場閉鎖では炭鉱の閉鎖と時期的に整合しないこと。『芦峯小沿革史』のその他の記述から、分教場の児童数21人は23年度末である「24年3月末現在」の数字とあるから、同年3月以前の閉鎖は考えられないこと。分教場の学級編成は、23年度中には2クラスだったので教員も2名だったが、うち1名（1, 2学年担当）は24年8月末に退職したため、9月からは残ったもう1名が全児童を一人で担任していたことが分かっている。しかし、註(33)に挙げた職員録には「昭和24年6月1日現在」として長尾分教場の2名の教員の名前が掲載されている。つまり、2名の教員が24年8月までは長尾分教場に在職しており、その時点で分校は存続していたと考えられること。閉校時まで担任したもう1名は、昭和25年2月～3月には長尾分教場ではなく本校で一学年の担任に任命され、その年度末（25年3月31）に退職していること。以上の点から、小論では閉校の日時は、昭和25年の1月20日であったと結論づけた。
- (37) 「富山日報」昭和12年10月1日付「県営鉄道の新線は、愈々けふから開通 新駅四つ開業し時間も改正／称名観光者に福音」には小見、本宮、芦峯寺、栗巣野の4つの駅が設置されたことが書かれている。路線が富山地方鉄道線になってからも小見（昭和45年7月1日、有峰口に改称）、本宮は現在も営業しているが、栗巣野は昭和56年5月22日に廃止。

芦峯寺は立山線が千寿原まで延長した頃に、炭鉱の閉鎖によって利用がなくなったのに伴って廃止されたと言われているが、明確な日時を記した史料は見あたらない。『日本鉄道旅行地図帳6号 北信越』（新潮旅ムック、今尾恵介監修、新潮社、2008）では、1953～57年頃の廃駅と推定しているが、根拠となる出典は示されていない。

- (38) 『富山地方鉄道五十年史』（富山地方鉄道株式会社、昭和58）148～149頁参照。『大山の歴史』（大山の歴史編集委員会、平成2）534頁参照。『大山の歴史と民俗』第18号（大山歴史民俗研究会、2015）40頁参照。
- (39) 佐伯「前掲報文」
- (40) 「富山日報」昭和14年7月27日付夕刊、前掲記事参照。「（前略）諸準備を急いでみたが索道の完成したのでけふ試運転をおこなつたところ頗る良好な成績を収めた、よつて来月上旬いよいよ採炭に着手することになつた（後略）」という記述がある。
- (41) 国立公文書館蔵 「鉄道免許・富山県営鉄道（富山地方鉄道）4 昭和12～14年」（請求番号平12運輸01413100）に「芦峯寺停留所を停車場の変更の件」（件名番号047）、「芦峯寺停車場竣工並同停車場施設変更の件」（件名番号050）がある。
- (42) 前掲「鉄道免許・富山県営鉄道（富山地方鉄道）4 昭和12～14年」には、昭和12年に「小見停車場構外側線敷設の件」（件名番号025）、「小見駅設備変更の件」（件名番号037）がある。小見駅は、昭和12年9月7日に分岐線路新設方認可がなされている。
- (43) 「富山日報」昭和14年4月28日付夕刊、5月7日付夕刊、8月18日付夕刊参照。
- (44) 『富山県総合開発 計画案』（富山県総合開発審議会商工委員会 礦業専門分科会、昭和27年策定）「立山炭鉱」の項参照。



写真1 旧立山炭鉱坑道銘板(当館保管)



写真2 長尾地区立山炭坑建物全景
米軍(国土地理院)撮影の空中写真(1947年撮影)
写真番号225を拡大

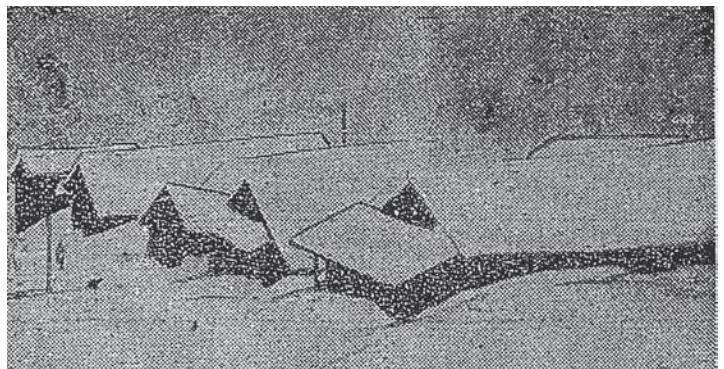


写真3 立山炭鉱宿舎全景
撮影は1月と思われ、建物全体が深い雪に埋まっている。
富山県立図書館蔵「北日本新聞」昭和19年1月21日「石炭戦線 立山炭鉱現地報告 上」をトリミング



写真4 芦峯寺駅の場所。駅名の上にある鉱山の記号が、立山炭鉱を示すと見られる。
富山県立図書館蔵『県営電気と立山』(昭和15年版 富山県電気局)をトリミング



写真5 常願寺川対岸の芦峯寺側から見た現在の芦峯寺駅跡(写真提供: 鉄道雑学研究所北陸支所)



写真6 現在の芦峯寺駅跡に残るホーム(写真提供: 鉄道雑学研究所北陸支所)

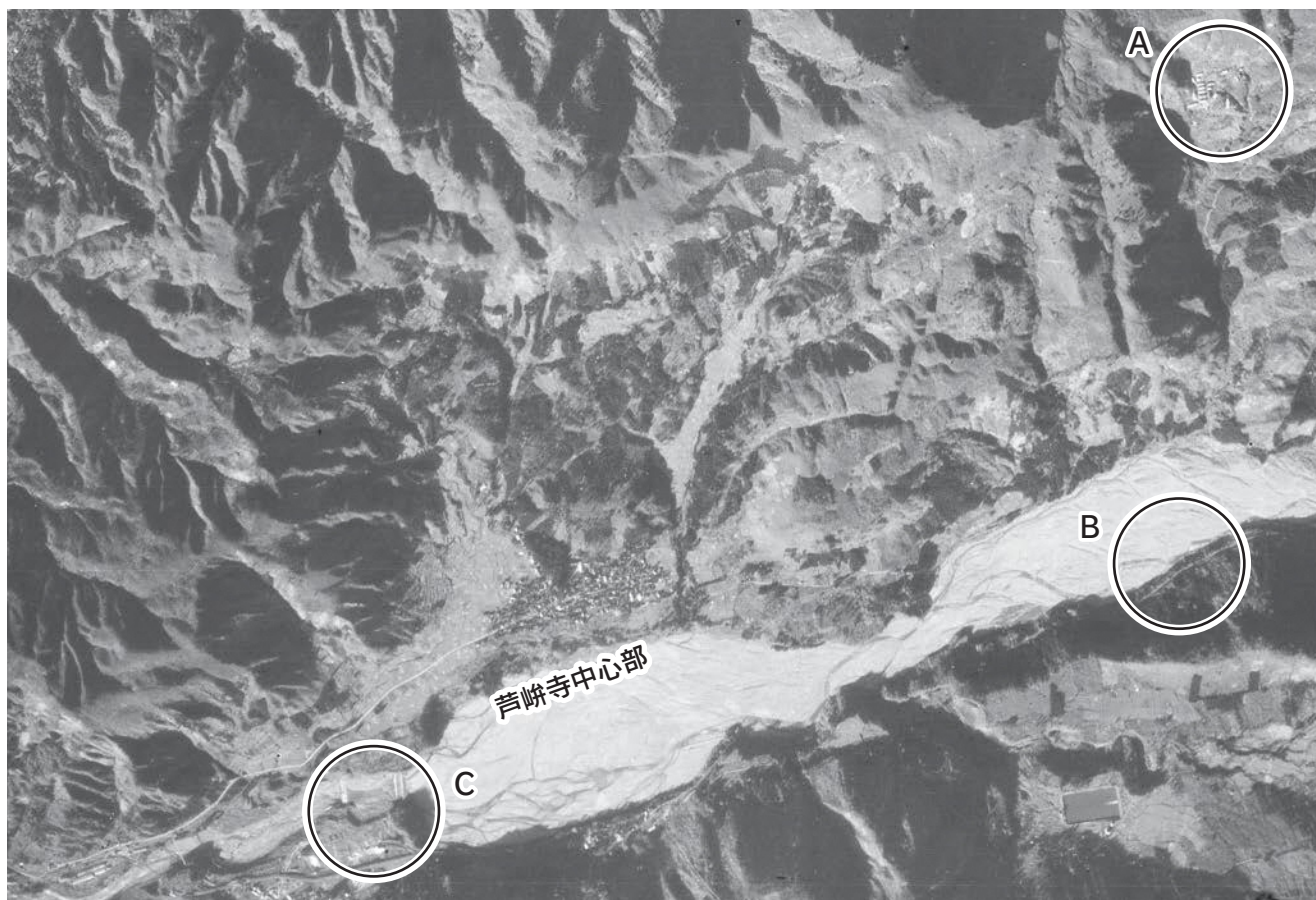


写真7 A長尾地区立山炭鉱、B芦峯寺駅推定位置、C小見駅付近
米軍（国土地理院）撮影の空中写真（1947年撮影）写真番号225をトリミング、加筆



写真8 芦峯国民学校長尾分教場の児童たちと教員
開校を報じる新聞記事写真から。
児童の背後に索道の塔が写る。
富山県立図書館蔵「北日本新聞」昭和21年5月31
日記事をトリミング



写真9 小見駅付近
米軍（国土地理院）撮影の空中写真（1947年撮影）写真番
号225を拡大

立山一帯での鉱山関連年表

年	立山の炭鉱、鉱山開発、分教場関連事項	芦峯寺駅関連事項、社会の動き
大正7(1918)	・「立山鉱業」(小塚貞義社長)出資を募る。硬質陶器原材料を生産。	
大正8(1919)	・7月「芦峯寺で無煙炭大量発見」の記事が出る(北陸タイムス)	
大正9(1920)		
大正10(1921)		
大正11(1922)		
大正12(1923)		・4月富山県営鉄道 千垣まで開通
大正13(1924)		
大正14(1925)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。	
昭和元(1926)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。	
昭和2(1927)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。	
昭和3(1928)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。	
昭和4(1929)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。	
昭和5(1930)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。	
昭和6(1931)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。	
昭和7(1932)	・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	
昭和8(1933)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。 ・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	
昭和9(1934)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。 ・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	
昭和10(1935)	・立山/東谷で石炭試掘の動き。 ・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	
昭和11(1936)	・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	
昭和12(1937)	・立山鉱業(荒川長太郎合名会社出資)設立 ・立山/東谷で石炭試掘の動き。 ・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	・10月県営電気鉄道が粟巣野まで延長、芦峯寺駅ができる。 ・蘆溝橋事件 日中全面戦争
昭和13(1938)	・立山鉱業、東谷で石炭試掘。 ・立山/東谷で石炭試掘の動き。 ・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	
昭和14(1939)	・8月立山鉱業、長尾で石炭の生産を開始。 ・立山鉱業、大谷で鉛、アンチモン、亜鉛の試掘。 ・立山石炭設立、本社は富山市太田口。 ・大日鉱業組合、大辻山で磁鉄鉱採掘開始。 ・立山で金、銀、銅、亜鉛、モリブデン試掘の動き。	・鉱石運搬用に大辻山から藤橋へ索道架設? ・芦峯寺駅にポイント等を設置し、停留場から停車場に変更される。 ・7月長尾の立山炭鉱から、対岸の芦峯寺駅へ索道架設。
昭和15(1940)	・立山石炭、大谷で鉛、アンチモン、亜鉛、硫化鉄の試掘。 ・立山鉱業、大谷で金、銀、黒鉛の試掘。	
昭和16(1941)	・立山石炭、大谷で鉛、アンチモン、亜鉛、硫化鉄の試掘。 ・立山鉱業、大谷で黒鉛の試掘。 ・立山/東谷/上段で石炭試掘の動き。	・アメリカ、対日石油禁輸強化 ・12月対米戦争開戦
昭和17(1942)	・立山石炭、大谷で鉛、アンチモン、亜鉛、硫化鉄の試掘。 ・立山鉱業、大谷で石炭の試掘。 ・立山鉱業、大谷で鉛、アンチモン、亜鉛の試掘。 ・立山/東谷/上段/釜ヶ淵で石炭試掘の動き	
昭和18(1943)		
昭和19(1944)	・2月北日本新聞「石炭戦線 立山炭鉱現地報告」特集記事を3日間連載。	
昭和20(1945)	・9月立山石炭本社を名古屋へ遷す。	・8月終戦
昭和21(1946)	・5月芦峯国民学校長尾分教場開校 ・11月芦峯寺国民学校、長尾分教場、千垣 分教場合同運動会開催。	・政府、傾斜生産方式をとる。
昭和22(1947)	・1月立山鉱業から不二越鉱業に採掘権が移り、炭鉱の経営者が代わる。 ・芦峯国民学校が、芦峯小学校と改称 ・長尾で新坑開発祝賀会が開かれる。	・配炭公団設立 ・臨時石炭鉱業管理法成立
昭和23(1948)	・立山石炭、立山炭工と改称 ・長尾分校生徒数39名で、2クラスになる。	
昭和24(1949)	・立山炭鉱、石炭統制価格廃止に反対してストライキを行う。 実質的に生産を停止し休山。	9月配炭公団が廃止。石炭統制価格廃止。
昭和25(1950)	・1月長尾分教場閉鎖。	

凡例：『芦峯小沿革史』『礦区一覽』『荒川百三十年』、本文引用の関連新聞記事等を参考にした。複数年継続して行われた試掘は年度に分けて記載した。参考文献に記載があるが、実態が確認できないものは「？」で表示したものがある。